

富山県
伝統
工芸
士会





事務局

〒933-0909 富山県高岡市開発本町1-1

高岡地域地場産業センター内

Tel. 0766-25-8283 (代)

Fax. 0766-26-7323

次代に伝える技と心

富山県伝統工芸士会

銅器

DOUKI

漆器

SIKKI

彫刻

CHOUKOKU

木工

MOKKOU

和紙

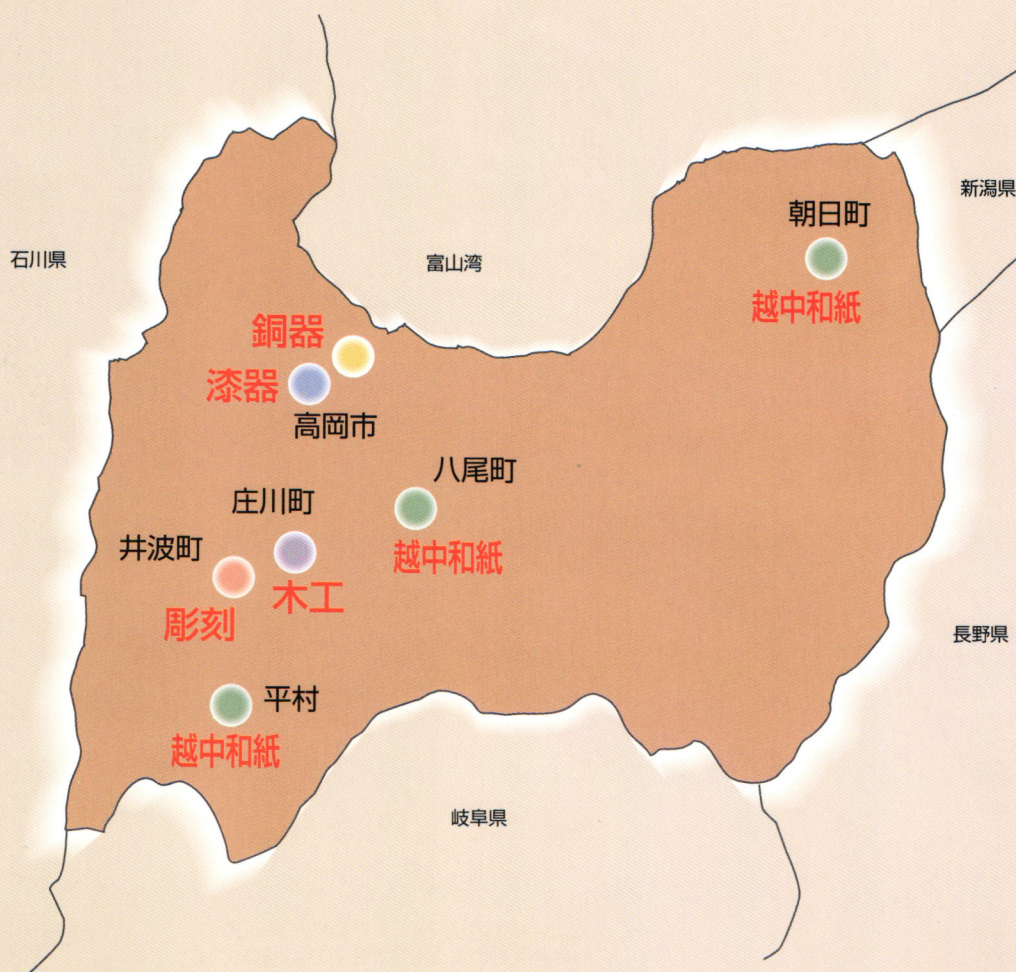
WASI

伝統工芸士とは・・・

伝統工芸品は、それぞれの産地において古くから受け継がれた高度の技術によるものであるため、技術の継承には多くの困難が伴い後継者の確保育成が大きな課題となっています。

この課題に対処するため、伝統的工芸品・工芸材料の産地ごとに、優秀技術者を対象に認定試験を実施。合格者に「通産大臣認定伝統工芸士」の資格を与え、その社会的評価を高めることにより、後継者対策・伝統的工芸品の質的向上に励むばかりでなく、優れた伝統的技術技法を次代に伝える指導者としての役割を果し、産業振興にも役立つことも期待されています。

このたび、富山県では伝統的工芸産地（高岡銅器・高岡漆器・井波彫刻・庄川木工・越中和紙）の伝統工芸士100余名により富山県伝統工芸士会を設立いたしました。目的は、相互の緊密な連携を基に伝統工芸士としての自覚を高め、その社会的地位の向上に努めるとともに、親睦を深め情報交換を行うことにより、富山県の伝統的工芸品産業の振興に寄与する事を目的としています。



通産大臣指定伝統的工芸品

左のマークは、通産大臣が指定した伝統的工芸品につけられるマークで、「伝統マーク」といいます。

11-100

高岡銅器

高岡銅器は慶長14年(1611年)加賀藩主 前田利長公が高岡開城後に招いた7人の鑄物師達(鑄物発祥の地 河内国丹南郡の技術を受け継ぐ)の手によって始まります。

当初は鉄鑄物が中心でしたが、江戸時代中頃から銅鑄物も盛んになりました。

明治期に入ると、技術力はさらに向上し、万国博覧会を通して世界にも紹介され、輸出品としても美術銅器は確固たる地位を築きました。

1975年には国の「伝統的工芸品産業」の振興対象に、1979年には「特定産業」の産地指定を受け、発祥より390年たった現在も高岡は、日本唯一の青銅器の産地として花器から野外のブロンズ像まで幅広い製造能力を誇示しています。



やきがた

焼型鑄造

粘土と水と和紙や藁などを調合した真土(まね)及び補強様の筋金を鑄型を作り、それを900℃前後の高温で6時間から16時間焼成し、溶けた合金を流し込みます。近代になって開発されたあらゆる鑄造法案の基本となる技法で、きめ細かさや深みのある色合いで焼型にかなう技法はないと言われます。



そうがた

双型鑄造

鑄造法としては最古の歴史を持っており、梵鐘などに代表される回転体の製作に用いられる技法です。外型は粘土と砂を調合したものを半形の規型で挽き、ヘラで直接模様を彫り込んで表面を焼き固めます。中型は砂を焼かずそのまま押し固めたものです。これを組み合わせ鑄造します。



彫金

金属に線や模様を彫り込む技法です。とりわけ鑄物生地表面に彫金を施すのは、全国でも高岡だけです。金槌と何十本ものタガネを使い、彫り跡で様々な模様を表現します。また別の金属を一段掘り下げた鑄物素地にはめ込む「象嵌」の技法も総じて彫金と呼ばれています。



ろうがた

蝋型鑄造

蜜蝋や松脂を煮合わせたものを、手と竹ベラや焼ベラ等で造形して原形を製作し、これに砂、水、和紙を調合した真土(まね)で包み乾燥させた後、高温で焼成します。熱で蝋が溶けてできた間隙に銅合金を流し込むと、造形した原形そのままの作品ができます。一つの蝋原形から一つの作品しかできません。



仕上げ

鑄物は表面の酸化膜を取らなければ良い色は着きません。仕上げとは鑄物のバリや黒皮と呼ばれる表面の酸化膜をヤスリやタガネ、センなどで削り取り、金属の光沢を出しながら、原型に忠実に表現する技術のことです。



着色

いわば鑄物生地の表面を腐食させることによって金属を発色させます。代表的な着色法に「おはぐろ」「焼色」「青銅色」「煮色」があり、これらは「古代色」とも言われ、酢酸鉄、緑青、硫化銅などの薬品で科学変化させることによって、銅合金の表面は様々な表情に生まれ変わります。

高岡漆器

高岡漆器は慶長年間、高岡へ移り住んだ塗師が指物や箆笥などの家具に漆を塗ったことが始まりです。その後、明和年間(1764~1772年)に、中国風の技術が取り入れられ工芸漆器の基礎が築かれた。高岡御車山の装飾にも当時の装飾が生かされています。

その後、幕末から明治にかけて、錆漆で山水・花鳥・人物などを描き、これに蠟石青貝を嵌入了錆絵技法「勇助塗」を創案。さらに明治中期には、「彫刻塗」や「青貝塗」などを開発し、主要な漆器産地として発展。

1975年、国の「伝統的工芸品」の指定を受けました。



勇助塗



青貝塗



青貝塗作業風景



彫刻塗



彫刻塗

井波彫刻

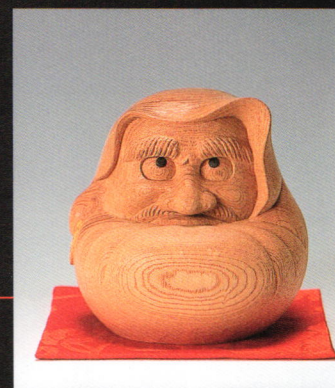
井波彫刻は浄土真宗大谷派井波別院瑞泉寺の再建のおり、(宝暦・安永年間1763～1774年) 京都本願寺の御用彫刻師前川三四郎が派遣され、井波拝領地大工に技術を伝授したのが始まりです。その後、数々の名工たちによってその名声を高めることとなりました。主に楠・ケヤキ・桐などを材料に、欄間・衝立・獅子頭・天神様などに代表される木彫刻品は、荒彫りから仕上げ彫りまで200本以上のノミや彫刻刀を駆使する高度な職人技です。1975年、国の「伝統的工芸品」の指定を受け、現在、300人余りにも及ぶ彫刻師が、制作に励んでいます。



獅子頭



置物(大黒天)



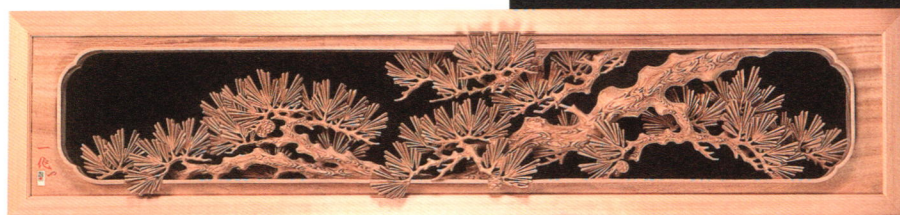
置物(達磨)



衝立(昇龍)



天神様



欄間(老松)



木彫額(獅子)



庄川木工

当地方は古来より、庄川上流の五箇山や飛騨地方の木材を川下げした木材集散地として栄えました。

挽物木地の起源は、慶応2年(1866年)越後屋清次が当地でロクロ木地を営んだのが始まりと言われています。

庄川の挽物木地は、ケアキ・トチ・クワ・エンジュ、国産材を素材とし、拭き漆を施したり磨きをかけたりし、横挽きによる美しい木目が特徴です。1978年に、「伝統的工芸材料」の指定を受けています。



樺百万塔



松造盆



樺茶托



樺茶櫃



栃造杢目大皿

越中和紙

越中和紙は、1200年の歴史を秘めて絶えることなく連綿として今日に受け継がれています。江戸時代においては、富山藩では売薬の包み紙として、加賀藩では料紙などいわゆる産業用紙や生活必需品として使用されました。明治以後は、流通や技術情報の交流も行なわれ、生産は一段と活発になりました。1988年には国の「伝統的工芸品」に指定されています。現在は、民芸紙・障子紙をはじめ、インテリア小物・人形・札入れなど幅広い商品を開発し、積極的に販路拡大に取り組んでいます。



越中おわら「風の盆」



八尾和紙



世界遺産「合掌集落」



五箇山和紙